

はじめに

「きもの」はその長い歴史の中で、大きな変革を遂げてきています。現代のきもの原形と言われる「小袖」からして、元は、上代の衣服令で最高の礼服だった「大袖」に対応した下着でした。下着が表着となる価値観の大転換を伴っているのです。こうした例は、様々なきもの文化に見られます。当会が主催する「きもの学」講座でも、これらの「価値観転換」(フレーム・チェンジ)が色々に論じられてきていますが、思いつくままに、主なものだけでも拾い上げてみましょう――。

①前述の小袖のように、重い上着を脱ぎ棄て、下着を上着化した「軽装化」。十二単の重ね着や重ね色目の変化もこれに当たるでしょう。②よく似た現象の「略礼装化」も進みます。天皇以下宮中貴族の礼服の決まりだった「衣冠束帯」もどんどん略礼装化されます。③略装化とともに「機能化」も始まり、その過程で一般の服装が採り入れられ、狩猟用の平服だった「狩衣」が公服に採用されます。現代風に言えば、スポーツファッションの始まりでしょうか。辻が花も、庶民の麻の単のきものに箔、縫い、絞りなどで加飾して、上級貴族や武家の一級の装飾着として生まれ変わります。

これらのフレーム・チェンジを可能にしたのが④「技術革新」でした。輸入技術で幕開いた天平の三纏以降は、大きな技術革新は見当たりませんでした。朱印船貿易で舶載された古渡り更紗などの斬新や色や柄に目を奪われたものでした。そんな中、江戸の友禅染めの発明は染技術の革新とともに、きもの観を変える出来事でした。⑤「大衆化」もきもの価値観の転換に欠かせない要素となります。特に商人文化が開いた江戸期は顕著で、洒脱で粋な時代の風が時には反幕の心意気を伴って色々な局面で現れます。見えない裏地や各種小物に凝ったり、奢侈禁止の幕令に抗して、一見地味な小紋に手間暇をかける――などに江戸の粋を表しました。小紋は武士階級の公服だった袴の小紋柄が一般に転用されたもの。また、当時、経済的に行き詰った大名家などから放出されたり、お城下がりや女中衆が持ち帰る式服から“御所解模様”が一般に流行します。流行の発信は徐々に一般大衆がカギを握るようになり、元禄期のファッションショーともいべき大名・公家の“衣装比べ”などの流行発信装置は、この時期、歌舞伎小屋や色町に移り、⑥「情報発信の変革」で、その中心を庶民層が担います。――等々、取り上げれば、きりのないほどきもの変革を促す出来事はあったのですが、その都度、きものは大きく変化していきます。

いま、きものレンタルや簡便な街きものが、〈正統きもの〉の流れを壊す、との論が巻き起こっていますが、きもの歴史を繙いてみたとき、決して平坦な流れではありませんでした。そして、大きな変革を乗り越えた成果が現在のきものに繋がっているとすれば、きもの歴史は、目下の変化も呑み込んで次代につないでいくべきだと、教えているように思えます。

基本方針

1. 既存事業を見直し、効果的な振興事業を模索する。
2. 「第12回きもの文化検定」の受験者の拡大と効率的運営に努める。
3. 組織の充実に努める。
4. 事務局機能の強化と運営の効率化に努める。

I 事業計画（案）

1 知識普及事業

- (1)「第12回きもの文化検定」の実施
- (2)「きもの学」の開講
- (3)学校教育和服着装事業
- (4)「きものコンサルタント」育成事業
- (5)21世紀の和装教育を考える—和装教育への5つの提言の実現化の研究事業

2 宣伝啓発事業

- (1)「きものの女王大会（地区）」事業への助成と支援
- (2)宣伝普及事業
- (3)共催・後援・協賛
- (4)「和装振興協議会」への参画
- (5)「未来国宝プロジェクト」への参画
- (6)「きものの日」のきもの着用の呼びかけ
- (7)「ユネスコ無形文化遺産」登録への協力

3 調査広報事業

- (1)調査事業
- (2)広報事業

4 会員対策事業

- (1)組織強化活動
- (2)表彰
- (3)慶弔